



蒲生君平の肖像画（小堀鞘音画、宇都宮市指定文化財・蒲生神社蔵）

特集／宇都宮の歴史と文化再発見

郷土の偉人 蒲生君平 を ご存知ですか？

その生涯と「没後二百年祭記念事業」

「蒲生君平」は江戸時代後期に活躍した学者です。儒学者であり、政治学者でもあり、歴史家でもあり、優れた教師でもありました。さまざまな顔を持つ君平は、宇都宮市の出身です。今年没後200年を迎えた蒲生君平の足跡をたどるとともに「没後二百年祭記念事業」をご紹介します。

蒲生君平の生涯をたどる

今年、江戸後期の学者であり、林子平、高山彦九郎と共に「寛政の三奇人」と呼ばれている蒲生君平の没後200年となります。

宇都宮に生まれ育った蒲生君平とは、どんな人物だったのでしょうか？ はじめに、君平の生涯を簡単に見て行きましよう。

宇都宮市の「宇都宮歴史と文化財ホムベージ」に、君平の生涯や業績の紹介が掲載されていますので、それを元に略伝を作成してみました。

蒲生君平／がもうくんべい
◎明和5年～文化10年（1768～1813）
名は秀実、通称は伊三郎、号は修静庵、字は君平・君臧

蒲生君平は明和5年（1768）、宇都宮の新石町（現・小幡1丁目）の燈油商の四男に生まれました。諱は秀実、通称は伊三郎、号は修静庵、字は君平・君臧といいました。

（諱）は本名、「字」は通称で、学者や文人がよく使っていました。日常生活で諱

「陵志」を完成させ、文化5年（1808）にそれを出版しました。その中ではじめて、今も使われている「前方後円」墳という名称が登場しました。

宇都宮藩の藩校・修道館の設立に参画していたとみられ、昌平坂学問所主宰・林述斎にも師事しています。

文化元年（1804）江戸の駒込吉祥寺に居を定め「修静庵」と名付けました。

ここで弟子に学問を教える傍ら、執筆にいそしみました。主著『山陵志』は、この時代に出版されています。

文化6年（1809）に妻をめとり、翌年日本橋石町へ移転。文化10年（1813）7月5日に没しました。46歳でした。

谷中（現・東京都台東区）の臨江寺に葬られましたが、後に宇都宮の桂林寺に分葬されています。

著書に『今書』、『山陵志』、『不恤緯』、『職官志』、『皇和表忠録』などがあります。

【主な著作】

君平は水戸光圀が編纂を始めた『大日本史』を補うために「九志」（神祇志・山陵志・氏族志・職官志・服章志・礼儀志・民志・刑志・兵志）の編纂を思い立ちました。それぞれの構想はまとまっていたものの、生前にまとめたものは『山陵志』『職官志』の2志に留まりました（『刑志』は執筆したものの散逸したと考えられています）。

を使うことは無く、日常では号か字で呼び合っていました）
父の名は福田正栄（又右衛門）で、父の死後、兄が家業を継ぎました。福田家は燈油商のかたわら農業も営み、家計は裕福だったと伝えられています。

6歳のとき、延命院で住職の良快和尚から読み書きを教わりました。また『太平記』を愛読していたといえます。この頃、祖母より祖先が戦国時代に活躍した会津の名将・蒲生氏郷であると教えられ「先祖の名を汚さぬ学者になろう」と決めたと伝えられています。

その後、鹿沼の儒学者鈴木木石橋や黒羽

『今書』 寛政4年（1792）

政治論として書かれ、神祇・山陵・氏族・職官・服章・礼儀・民・刑・志の九志の構想に発展した。没後の文久3年（1863）刊行。

『山陵志』 寛政12年（1800）頃

荒廃した近畿地方の陵墓（歴代天皇皇族の墓）を調査した研究書。取り扱われているのは、天皇の陵墓。ちなみにこの書の中で、初めて「前方後円」墳という言葉が使われた（それまでは「車塚」などと呼ばれていた）。出版は文化5年（1808）。

『不恤緯』 文化4年（1807）

当時懸念されていたロシアの進出に対し、国防論を建白し、その中で、士族に頼らず、民兵を用いることが得策であると論じている。後に吉田松陰の松下村塾からも出版されている（安政5年刊）。

コラム①

年長の歌人 小沢蘆庵と心のふれあい

君平が主著『山陵志』執筆のために、京都の知人である小沢蘆庵宅に逗留していました。蘆庵は歌人であり、和漢の学問にも通じた学者でもありました。君平よりも45歳年長でしたが、二人が心を通じ合わせるようになったいきさつを、君平の知人だった作家の滝沢馬琴は、このように書いています。

蘆庵は礼儀正しい人物で、君平が戻るまで必ず自分も起きて待っていたといいます。ある日、君平の帰りが夜中過ぎたため、さすがに「どうしたのか」と咎めると、「天皇陵の調査の帰り、等持院を通りかかり足利尊氏の墓に詣でたのだが、彼が天皇に背いて天下をわがものにしたことに怒りがこみ上げ、持っていた杖で何度も打ち据えてきました」と答えました。蘆庵はその心に感じ入ったと伝えられています。

『職官志』 文化7年（1810）頃

朝廷の官職、官位、身分階級、官制を解説した書物。文化8年（1812）に第1巻を出版、続巻の出版は没後の文化13年（1816）となる。

『皇和表忠録』 執筆年末詳

多くの学者が外国の忠臣のみを唱導するのに対して、深く我が国の歴史を顧み、古典のうちにすでに君臣の大儀の明らかであることを弁じたもの。出版は明治元年（1868）。

（宇都宮の歴史と文化財）蒲生君平 http://st0011.nas931.utsunomiya-nptc.ne.jp/ext/jinbutu_syousai/ganokunpei_in.html に加筆修正）

蒲生君平の精神を伝える 「没後二百年祭記念事業」

蒲生君平の偉業を讃えるため、今年「没後二百年祭記念事業」が行われています。主催者である没後二百年祭記念事業実行委員会の中核メンバーに事業の意義や、今に生きる君平の偉大さなどについて話していただきました。

記念講演会やシンポジウム、企画展など

昨年7月に結成された「蒲生君平没後二百年祭記念実行委員会」（日野原正委員長）では、蒲生君平の功績を讃え、より広く知ってもらうための事業を行っています。

① 出版事業

メンバーの1人、阿部邦男さん（宇都宮市立田原中学校副校長）が、今年3月に



『蒲生君平の「山陵志」選述の意義』を学位論文として出版しました。蒲生君平の生涯と、主著の一つ『山陵志』についての長年の研究成果をまとめたものです。

また、現在君平の生涯をまとめた絵本の制作も計画しています。子どもや若者にアピールし、分かりやすく功績を広める一助にすることが、主な目的です。

② 記念講演会・シンポジウム

11月10日（日）に宇都宮市文化会館小ホールで、記念講演とシンポジウムを予定しています。

【日時】

11月10日（日）

午後1時～午後4時30分

【会場】 宇都宮市文化会館小ホール

【客数】 500人

（以上 敬称略）

また、「蒲生君平の志と水戸黄門」をテーマとした企画展も開催します。

【日時】

11月8日（金）～14日（木）

午前10時～午後4時

【会場】 宇都宮市文化会館2階展示室

【料金】 無料

記念講演会・シンポジウムとも、いずれも委員会が主催し、宇都宮市・宇都宮市教育委員会・蒲生神社奉賛会・下野史談会・歴史文化を伝承する市民の会が共催しています。

またこれに伴い、ワンコイン募金も行い、市民レベルでの応援をお願いしています。

- ・若松正志（京都産業大学教授、仙台市史・林子平担当委員）
- ・正田喜久（高山彦九郎研究会会長）
- ・阿部邦男（蒲生君平研究家）
- ・コーディネーター 日野原正

コラム②

「寛政の三奇人」と蒲生君平

寛政の三奇人は、その名前の通り、江戸時代の寛政期に活躍した、『海国兵談』などの著書で国防の重要性を唱えた林子平（1738-1793）、尊王思想家の高山彦九郎（1747-1793）、それに蒲生君平の3人のことです。「奇」とは「奇妙」「怪しい」などの意味ではなく「優れた」という意味です。もっとも、いずれも個性的な人物だけに、多少は奇行もあったようです。

寛政元年（1789）に江戸に出た君平は、この地でまず高山彦九郎と知り合いました。その後、彦九郎が陸奥へ旅立つと、君平も後を追ひ、その帰路に仙台で林子平を訪ねています。

林子平は『海国兵談』で罪に問われ、寛政5年（1793）に病没。同じ年、高山彦九郎も久留米で自刃しています。彼らの晩年に知己を得た君平が、大きな衝撃を受けたことは間違いないでしょう。君平はその後、子平の対外危機意識と、彦九郎の尊王精神を結びつけ、自らの思想に取り込んでいきます。

コラム③

少年時代の逸話

君平の少年時代、ある冬の夜に近所で大火事があり、家中が大騒ぎになりましたが、いつの間にか君平の姿が見えなくなりました。鎮火後、どこからともなく戻って来た君平に両親が「皆が火事の対応に追われている中、手伝いもせずどこに行っていたのか」と叱ると「火事のおかげで明るく、本を読むのに具合が良かった」と答えたので、皆呆れたと伝えられています。

また君平は15歳頃に鹿沼の儒学者・鈴木石橋の塾に入り、いよいよ学業にいそしんでいましたが、ある夜屋根の上で満月の光の下、読書に没頭していたところ、隣家から泥棒が出てくるのを発見しました。しかし君平は読書を優先。そのまま逃がしてしまいました。翌日、近所で騒ぎになった時に君平が「昨夜の泥棒は東に逃げました」と言うのを聞いて、一同あざんとしたということです。

例大祭、盛大に齋行

本年7月5日に、例大祭・蒲生君平没後二百年祭が盛大に齋行されました。

蒲生神社の葭田孝宮司は「二百年祭をきっかけに、将来へ向けたさまざまな活動を考えて行きたい。せっかく開催するので、すから、一過性でなく、形に残したいと思っています」と言います。百年祭をきっかけに誕生した蒲生神社を護り育てる葭田宮司だけに、思入れもひとしおでしょう。

日野原正委員長は、横浜市出身で、現在は獨協医科大学名誉教授。蒲生神社奉賛会会長でもあります。「5年ほど前から具体的に計画を練り始めました」と振り返ります。「10程の案が固まって来て、そこから現在の事業案が生まれたのです」毎月1回、蒲生神社に集まって意見交換を行い、まさに「手作り」で企画を固めていったと言います。

メンバーの志は「没後百年に負けないものを」で一致していました。没後百年では、かつての宇都宮藩主などが蒲生神社創建を運動するなど、君平の功績を広める気運が高まりました（コラム「蒲生神社の由来」参照）。

同委員会の小林暁雲事務局長は「この委員会は昨年7月8日に正式に発足したのですが、事業については、平成17年のころから『二百年祭には企画展や講演会などをやらなければ』と話し合っていました。蒲生神社の葭田孝宮司や奉賛会、歴史文化を伝承する市民の会のメンバーなどが中心となって、準備を始めていました」と言います。

委員会メンバーでもあり、歴史文化を伝承する会会長でもある谷田部峻さん（谷田部石材販売株会長）も、「せっかくの二百年祭で、どういった夢を生み、紡いで行かかが大切」と強調します。「こ



けんせん 献饗



しゅばつ 修祓



けんたいしき 献幣使祭
ぞうじょう 詞奏上



のりとそうじょう 祝詞奏上

本年7月5日に行われた例大祭・蒲生君平没後二百年祭の模様

特集／宇都宮の歴史と文化再発見
郷土の偉人 蒲生君平をご存知ですか？



03

勅旌碑

ちよくせいひ

花房三丁目

明治2年(1869)12月、明治天皇は「君平の人となりや行いがまことに立派であるから、これを広く郷里に表わし庶民に知らせるように」と勅命を下し、それを受けて宇都宮藩知事戸田忠友が碑を建てました。これが、現在花房町3丁目道路東側にある「勅旌碑」で、屋根の下に建立されています。また、碑は宇都宮市の文化財に指定されています。



02

御贈位記念碑

おんぞういきねんひ

宇都宮二荒山神社

蒲生君平の没後68年目にあたる明治14年(1881)、国より正四位の位階が追贈されました。これを記念した碑が、現在は宇都宮二荒山神社西参道北側にある「贈正四位蒲生君平碑」です。篆額が大勲位有栖川織位親王の御染筆で、選文は文学博士重野安繹、書は元老院議員巖谷修氏です。



01

蒲生神社

がもうじんじや

塙田五丁目

大正元年(1912)の没後九十九年祭の際に神社創建の話が起り、大正15年(1926)7月に蒲生神社本殿が竣工されました。毎年7月5日には蒲生神社例大祭が厳肅に行なわれています。また、毎月5日には月次祭が行なわれています。



04

誕生地

小幡一丁目

蒲生君平は明和5年(1768)に当時の新石町、現在の小幡1丁目で生まれました。生家であった福田家は、今では跡形もありませんが、昭和5年(1930)に『蒲生君平先生誕生之地』と刻まれた石柱が建立されました。当時は大通りに建てられていましたが、現在は小野瀬ビル裏手に移築されています。



05

墓所

桂林寺

文化10年(1813)に没した蒲生君平は、友人知己により東京谷中の龍興山臨江寺に手厚く葬られました。明治14年(1881)の贈位により「宇都宮に里帰りをする有志の運動によって、宇都宮市清住の桂林寺にあった蒲生家墓所に、遺髪が葬られました。墓石は現在松の木の下に建てられ、その左には子孫による「贈正四位修静院殿文山義章大居士」の碑があります。



07

修学の地

延命院

安永2年(1773)、6歳になった君平は、近所の泉町にある延命院で、住職の良快和尚から読書習字の手ほどきを受け、また儒教の基本経典である四書五経の素読を教えられました。これがその後の長い学問人生のスタートラインとなりました。



06

蒲生君平坐像

東小学校

宇都宮市立東小学校の校庭正門左側にある蒲生君平坐像は、昭和15年(1940)に皇紀2600年を記念して建てられました。石を五段に積んで、その上に上下姿の坐像が、児童たちを見守っています。



08

街角広場

裁判所前

「前方後円」墳の名付け親である蒲生君平の偉業をたたえ、その前方後円墳をモチーフにした公園です。宇都宮地方裁判所の道路を挟んだ南側に位置し、四季を通じて地域の憩いの場となっています。

コラム④

蒲生神社の由来

蒲生神社は、蒲生君平を祭神として祀る神社です。

大正元年(1912)に没後九十九年祭が行われた際に神社創建の話が起り、「蒲生会」(現・蒲生神社奉賛会)が結成されました。会長には前藩主の戸田忠友が就任し、建設資金の募集を開始しました。

大正10年(1921)3月、神社創建願を内務省に提出し、同年7月に創建の許可が下りました。12月、栃木県から無償で提供された三蔵山の地ならし工事が行われ、いよいよ建設が始まりました。

神社本殿の竣工は大正15年(1926)7月16日のことでした。その後今日まで、蒲生神社は市内・市外はもとより全国に多くの崇敬者を集めています。

長い石段を登り、緑に囲まれた境内にある拝殿は、どっしりとした風貌を持っています。現在はその右手に、これも郷土の生んだ初代横綱・明石志賀之助の石像が建っています。

蒲生神社では毎年7月5日に例大祭を行っています。また毎月5日には奉賛会有志による月次祭が行われています。宮司は代々、今泉の八坂神社の宮司が兼職しています。



神社建設予定地と明治天皇の命により宇都宮藩知事戸田忠友が建立した勅旌碑。【絵葉書が映す下野の明治・大正・昭和 石井敏夫絵葉書コレクション】(随想舎)より



左から小林事務局長、殿田宮司、日野原委員長、谷田部委員

蒲生君平の魅力、現代の意義を探索

事務局長の小林暁雲さんは蒲生君平の人生を学ぶことにより、私たちの人生のあり方など、さまざまなことが学べると言っています。

「君平は、祖母から自分が蒲生氏郷の末裔であることを教えられました。彼が一念発起して優れた学者になったのは、まさにこの祖母の教えが出発点です。また君平が時に家の手伝いを忘れるほどに読書に熱中できたのは、家人の理解があったからこそでしょう。身近な人間の影響、家庭教育の大切さを教えてくれます」

小林さんも、子どもの頃に教師だった母親から蒲生君平について教えられ、そこから歴史や文化への興味につながったそうです。「私は『偉人を作るのはあなた』と表

現しています。歴史、文化、偉人の業績を語り伝えることが、次の世代の偉人を生み出すのではないのでしょうか」

横浜生まれで、獨協医科大学に教授として来県するまでは君平について知らなかったという、日野原委員長。

「栃木に来て、歴史家で教育者の故・雨宮義人先生の知己を得ました。先生から君平について教えていただき、大きな感銘を受けたのがスタートです」

調べていくうちに、君平の魅力に引き込まれていった日野原さんは、蒲生神社奉賛会の会長に就任するなど、県内の蒲生君平研究の中核の1人になっていきました。

「栃木県には、天台宗の僧侶で中国まで旅した円仁や、足尾鉍毒事件で名高い明治の偉人・田中正造、それに蒲生君平など、偉大な人がたくさんいます。それなのに、一般の方はまだまだご存じない。大変

残念です。この事業が、今後の市民の歴史文化への興味を呼び起こす一助になればと思っています」

君平は単なる学者ではなく、政治建白書である「不恤緯」を著すなど、世の中に積極的に関わっていった人でした。その業績をたどり、思想や人生を学ぶことは、決して「お勉強」ではなく、現代に生きる私たちにとても、大切な何かをもたらしてくれるのではないのでしょうか。

問合せ

蒲生君平没後二百年祭記念
実行委員会事務局
小林暁雲事務局長
☎080-5177-1103
e-mail:
kunpeigamo@gmail.com